町民文芸

只見短歌会　十二月詠草

大塚栄一　指導

春待たず蕾ふくらむ蕗の薹鉢に移して玄関に置く　吉津久仁子

押花を歌集にはさみ貸しくれし彼の人今は如何に老いしか　齊藤ちひろ

五十センチ降りし初雪軒下に残るを踏みて朝刊配る　五十嵐夏美

子が頼みしサンタ入り来て握手すれば極まりし孫つひに泣き出す　古川　英子

玄関の建替へ工事やうやくに終りし夕べ門松届く　皆川　恒子

師走にて宅急便と幾度もピンポン鳴れば表を確かむ　吉津　政枝

裏の田に落穂漁るや猿の群近づき行けど逃げ出しもせず　渡部ゆき子

送り来し荷物包みし広告を伸ばして町の品の値を見る　馬場　八智

生れ日に餅を負はされたどたどしく歩む孫囲み目を離されず　目黒　富子

久々に手紙を書けば漢字など忘れ奥より辞書を持ち来る　渡部ヨリ子

入所の姉のクリスマスに来て声低く唄ひしことなき賛美歌うたふ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　一月例会

目黒十一　指導

小春日や菅笠売りに峠越え　吉児

雪吊のなべて張りたる雪の嵩　隆堂

暮れなずむ本堂障子雪明り　洋子

シャッターを開けて新たな年と逢う　邦夫

みぞるるやイルミネーション泣き　郁子

じゃくる　終列車雪まとうままライト消す

ぽんちょ着て黙って二人日向ぼこ　康女

石蕗の花きっぱりと咲き露地の明け　アツ子

デパートの椅子にしばらく年の暮　冬日差す手元暖か厨事

ひとり居の畳に沈む寒さかな　リウコ

送る荷に一枝添えし実南天　郁子

白雪の浅草山の稜線よ　北風の去るや枝葉の大仰に

樹氷する山に見惚れる朝かな　都

存分に雪にまみれて歩を進む　礼

切り株に降っては消える師走雪　笑顔とはかくも麗し雪明

君偲び仰げり冬の赤城山　一穂

凍み餅を搗けりもっとも寒き日に　一灯

仏壇のお茶を注げり室の花　薄凍や白鶺鴒の番い来る

婚礼の祝ぎ物並べ十二月　痩せた太陽いまくれかかる師走かな

母になる事の喜び針供養　邦男

人生の模様さまざま冬木の芽　笑羊

正月やフランス風の子の料理

鏡台の軋む抽斗寒の入　恒夫

虎落笛聞き書きノート埋まりけり

寒禽の一羽水場を領しけり